



Title	中世初期宮廷女流文学の研究
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58540
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【12】	
氏 名	丹 下 暖 子
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 4 2 8 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	中世初期宮廷女流文学の研究
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 加藤 洋介 （副査） 教 授 金水 敏 講 師 合山林太郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、院政期から鎌倉初期にかけて成立した宮廷女流文学作品である『讃岐典侍日記』ならびに『建礼門院右京大夫集』を考察の対象とし、ともに作者と親しい関係にあった故人追慕が主題とされる両作品について、故人追慕とは異なる視点から新たな評価を試みようとするものである。（400 字詰原稿用紙換算約 390 枚）

前編「『讃岐典侍日記』の研究」では、堀河天皇の「崩御の記」（上巻）・「追慕の記」（下巻）と評される『讃岐典侍日記』について、鳥羽天皇への世替わりに関する記事に注目するところから、『讃岐典侍日記』の位置付けを試みる。

第一章では、幼帝鳥羽天皇に関する記事を取り上げ、下巻が堀河天皇「追慕の記」であるとともに、鳥羽天皇の代始めを記録し賛美する一面をも有していることを指摘する。第二章は、「崩御の記」とされる上巻には、譲位をめぐる記事や帝を取り巻く人々の言動が記録されるなど、鳥羽天皇への世替わりを意識した記述が散見することから、上巻には天皇の世替わりという過渡期の動向を記録しようとする姿勢が見られることを示す。第三章では、鳥羽天皇出仕後の讃岐典侍による堀河天皇追慕には、常に「今」と対比しての回想という構造を見出すことができることを指摘し、鳥羽天皇に出仕する「今」との関わりの中で堀河天皇を位置づけようとする『讃岐典侍日記』の方法を提示する。

後編「『建礼門院右京大夫集』の研究」は、源平の動乱によって失った恋人平資盛の追慕が主題とされる『建礼門院右京大夫集』には、建礼門院徳子のもとに出仕した日々の歌や題詠歌群など、資盛追慕には直接結びつかない歌も採録されており、そうした歌を含む歌群を対象として、その構成や配列、歌の改作や特異な表現の様相について検討をする。

第一章では、大きく二部に分けられる『建礼門院右京大夫集』の前半部について、そこ

に登場する平家一門の人物に注目することで、前半部が明確な構成意識のもとに配列され、平家全盛期の宮中を記録しようとした面があることを指摘する。第二章では、資盛追慕にはそぐわないはずの藤原隆信との恋の贈答歌が含まれる「資盛・隆信歌群」を取り上げ、そこには『建礼門院右京大夫集』が意図的に行った改作が施されていることなどをもとに、〈色好み〉の男との恋物語の歌群として形成されたという虚構性を明らかにする。第三章は、「七夕歌群」と称される五十一首の七夕歌について、牽牛織女に自身の境遇を訴えたり、「彦星」の語を詠み込むなど、通常の七夕歌からの逸脱ぶりを指摘する。第四章では、後鳥羽天皇に再出仕した後の歌から、藤原俊成九十賀の記事を中心に分析を試み、『建礼門院右京大夫集』が「昔のこと」（源平の動乱前後の時代）を語る歌集であり、再出仕歌群はその語り手として作者を位置づけるものであったことを主張する。

論文審査の結果の要旨

亡き人物を追慕する宮廷女流文学作品として評価されてきた『讃岐典侍日記』・『建礼門院右京大夫集』の両作品について、本論文は追慕とは異なる性格をも併せ持つ作品であることを明らかにしている。これまでの『讃岐典侍日記』研究においては、鳥羽天皇への言及や賛美は、堀河天皇追慕という主題を分裂させ破綻させるものとして捉えられてきた。それに対し『讃岐典侍日記』には、諒闇前後の鳥羽天皇の変化を正確に描写し、あるいは先例を参照しながら鳥羽天皇の即位式を記録するなど、清暑堂御神楽の鳥羽天皇賛美と相俟って、「代始めの記録」としての性格を持つことを指摘したことは、『讃岐典侍日記』の新たな一面を示したものと言いうる。また三度にわたる堀河天皇の月忌みの場面に、類似した追慕のありようを読み取り、「今」との対比によって堀河天皇に想いを致すという過去を回想する構造を指摘したことも、今後の『讃岐典侍日記』研究にとって有益である。

『建礼門院右京大夫集』についても、平資盛追慕ということだけでは捉えきれない作品の複雑な様相を明らかにしている。前半部における平家一門の人物の扱いやそれに関わる詠歌の配列や構成の特異性に注目したこと、「資盛・隆信歌群」について改作による虚構性を指摘したことも高く評価できる。これらは平資盛追慕という従来の評価からいったん離れることによって、明らかにすることができた成果であると思われる。「七夕歌群」の分析においても、着実な論証によって、和歌史における『建礼門院右京大夫集』の独自性を浮かび上がらせている。

一方で、『讃岐典侍日記』については、鳥羽天皇への「代替わり」や「代始め」の記録ということが、どのような目的のもとになされたものであったのか、もう少し深めた議論が欲しいところである。序文や跋文への言及も必要であろう。『建礼門院右京大夫集』についても、従来の資盛追慕という主題と今回新たに指摘した問題とが、どのように関わるのかの検討がなされてしかるべきであろう。本論文で取り上げた二作品を関連づける、さらなる文学史的構想力が望まれるところである。

以上のような問題点を含むものの、本論文が『讃岐典侍日記』および『建礼門院右京大夫集』をめぐる諸問題の解明を通して提示したことは、研究史的に高く評価できると思われる。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。